

ケアする災害復興に向けたモノとの関係性

—石川県七尾市中島町での民間災害ボランティア支援を通じて

Gazing Relationship of Actors for Caring about Disaster Rehabilitation

—From the Fieldwork Through the Private Disaster Volunteer at Nakajima Town, Nanao City, Ishikawa Prefecture.

土田 亮 独立行政法人日本学術振興会 PD
Ryo Tsuchida

1. はじめに：ためらいながら考える

「人の生活感が出るモノを捨てるのにためらってしまう」
(2024/02/25 センターでの夕食にて、フィールドノート)。

今この特集に向けた論考を執筆し、スマホのメモに書いた断片を見返しては再び思い出した。他者のモノを捨てる行為や場面は被災後であれ何であれ、ある程度抵抗や忌避を感じることに違いない。それでも強調したかったのは、モノが惹起する人格的な記憶や生活の質感に触れざるを得ない場面だったからだと思う。

本論考では、能登半島地震の被災地や被災者にとってよりよい災害復興とは何かと一般化された理念や教訓を一旦留保し、漸進的に他者や他なる存在との関係性の網目を継ぎはぎし、状況に応じて生活の個別性や具体性に寄り添い、復興の方向性を共同的に何度も探求・実践し続ける記述の志向性に重きを置く。この過程の探求を「ケアする災害復興」と指し、それに内在しうる関係性の諸相を考えることを通じて、別様な復興に向けた視点を提示する。以降、2024年2月23～29日までの民間災害ボランティアセンター（以下、小牧集会所）と地域のかかわりあいを通じた自身のフィールドノートの断片的なメモを中心に、ケアと復興の様相をあえて取り留めもない形で記述・考察する。

2. 石川県七尾市中島町での民間ボランティア支援の記述

(1) 地域と小牧集会所の概要⁽¹⁾

能登半島の中央部、能登島の近くである石川県七尾市中島町小牧（おまき／人口は約180人、77世帯）の集落では、地震発生から電気、水、ガス、通信などのライフラインがすべて止まった。避難してしばらくは外から孤立した状態で、多くの人びとが近隣の親戚の家や都市部に身を寄せた一方で、集落内に残った人びとは公民館や車中泊で不安な夜を数日過ごした。集落の避難所（公民館）は指定避難所ではなく自主避難所であるため、行政からの水や食べ物、

物資の支援はほとんどなかった。今では電気や道路、ガスのインフラ復旧は進んだが、水道の復旧は早くも2月末、遅いところは4月以降までかかる予定である。

小牧集会所を開ききっかけは、被災地 NGO 協働センターのメンバーが2007年の能登半島地震後の復興支援で写真集を作ったり、お熊甲（くまかぶと）祭り⁽²⁾に参加したりしたことであった。以来、メンバーと地元の壮年団との親交があり、そのおかげで拠点を構えることができた。2月末までは集会所が開設してからは、ほぼ休みなしで事務局スタッフらがニーズシートを用いた被災状況の収集、現地ヒアリング、物資搬入・配布、ごみ収集、炊き出し、セラピー（足湯、マッサージ、整体、動物とのふれあいなど）、地域内・外、他団体の支援や物資受入の調整にも応じてきた。兵庫県神戸市や佐賀県武雄市から事務局スタッフらが引き継ぎしながら地域のニーズに応じてきたが、スタッフが地域で拠点を構え長く活動を続けるために、3月からは週1日物資配布のみ定休日としている。

(2) 戸惑いと曝け出し

冒頭のためらいは以下の場面からである。私が瓦礫やゴミの運搬を手伝っているときに、その中でも一つ、私が軽トラに積む中で戸惑ってしまうものがあった。色褪せて糊付けされて額縁に入った、半畳より大きな長方形の、ピースの細かいパズルである。それだけでどんなモノか分かってしまう。どれくらい時間を費やしてこのパズルを完成させたか。几帳面だろうか、糊付けはぴっちりとしてあり、綺麗に額縁に入っていた。日の当たるところに置いてあったか、主色の青と白は薄く色が抜けていた。私はなるべくそれを崩さないように、襖と襖のあいだに差し込んで、ここから車で5分ほどのゴミ仮置き場に持って行った。

ゴミ仮置き場に到着して、私はひたすらモノを降ろしていく。この場合は布団・枕、プラスチック小型家電、ディスプレイ、壁材、金属類、木材、ガラス・陶器・食器などきつ

ちり分別されている。この場を仕切っている若い男性に指示を仰いで、布団や襦をそれぞれの場所に持って行く。そしてパズルを持ち出し「このパズルはどこに持っていったらいいですか？」と尋ねると「あー、それは処理場に出せないね。一般ゴミ。小さくして、持ち主のところに持って帰って、指定の袋に包んで捨てて」と言われた。その時、はじめてこのパズルがゴミであることを認識したように思った。今からこれを私が解体して捨てなければならないと思うと、やるせなくなった。額縁と外を覆っていたアクリル板を外し、パズルをくしゃっとさせようとする。糊付けられているから思うようにバラバラにならない。手でちぎるように引っ張らないと嵩は小さくならなかった。その日はそんな解体と搬出作業の繰り返しだった。

次の日の夜、小牧集会所の和室でスタッフとまかない飯を囲みながら、その日何があったか、反省点、明日の仕事、地域の声やスタッフ内での不満を共有した。私は抱えきれず「人の生活感が出るモノを捨てるのにためらってしまう」と吐露した。中年のベテランの男性スタッフが「それはわかる、若者もちょっとぎょっとしてた」と共感した。続けて昨日の作業で窺った家の事情を話した。「あそこの家の人は、段取りよくボランティアさんに指示をして、あつと言う間に片付けられていったね。でも、ある時、その人が『この部屋は触らないでね。あとでゆっくり片付けたいから』とボソッと呟いたのよ。それでね、『ああ、その人は長年暮らして来た家や物との思い出や家と向き合いながら、ゆっくりと整理したいんだ』とハッとさせられて。同時に家を取り壊して再建はしないと決めた覚悟のようなものも感じたね。」そして、もう一人の女子大学生のスタッフもこの話に乗ってきた。「だから、私、人と一緒にいますもん。私がしたくない、私は捨てられないからそっと置いている」。



図1 解体しきれなかったパズルの残骸

3. おわりに：現場に曝されながら考える

本論考では、仮置きした「ケアする災害復興」に込められる理念を、民間災害ボランティアでの参与観察を通じて照射することを試みた。未だ先に進まない復旧・復興の瓦礫の撤去やゴミの処分のなかで筆者が感じたことは、何らかの関係性を喚起するモノの存在が、誰かの何かの復興の形を方向づけるかもしれないということであった。

医療人類学者のモルは「ケアのロジック」¹⁾という興味深い概念を提示する。これは個人的な困難を抱えた人の状況を改善し、悪化しないようにするための、各々の生活の個別性や具体性に寄り添った、持続的な調整を伴う実践を指す。本人がどんな状況で、誰と生活していて、どんな問題に直面しているか、どんな人的・技術的リソースが利用可能か、それを使用することで何を選びうる必要があるかという視点での配慮や具体性を理解することが善 (good) だとモルは指摘する。これをアレンジすれば、別様な復興や「ケアする災害復興」に向けて、解があらかじめ与えられていない状況でも、被災者とそれを取り巻く家族、ボランティア、瓦礫やニーズシートなどあらゆる道具などの人工物もが集められるかかわりあい、よりよいケアを形づくろうと志向する。佐賀県武雄市で2019年と2021年に起こった豪雨洪水災害後の復興でもモルのケア像を私はなんとなく感じていた²⁾。今回の能登半島地震を受けてどんな災害復興を辿るか、復興像のよさや善は誰にも何にもわからない。何らかの形の災害復興に向けて、現場に曝されながら、人びとの動きや思考だけでなく、モノからの働きかけに誘われ、何をすべきか、という問いを場で共有し、被災者やそれを支える研究者や実践者、制度設計者、行政などの人びとが協同的に実践していく態度を忘れてはならない。今も何らかの形をとった復興は進もうとしている。自他のあいだ、モノとのあいだで生まれる行為から創造的な関係を継ぎはぎする復興の日々や主体は現れるだろうか。

<補注>

- 1) 第2節では、現場でともに動いていた被災地NGO協働センターのスタッフによるニュースレター³⁾も参照し、記述した。
- 2) 毎年9月に、20m超えの幟旗(わくばた)を30人ほどの人数で持ち上げるお祭りである。

<参考文献>

- 1) アネマリー・モル(田口陽子、浜田明範・訳).2020『ケアのロジック：選択は患者のためになるか?』水声社。
- 2) 土田亮.2023「災間期におけるケアのロジックの試論：いかに主体を継ぎはぎするか?」2023年度日本建築学会大会(近畿)多元性に着目した復興再考[若手奨励]特別研究委員会 パネルディスカッション資料「若手研究者による「復興」再考：多元性の理解に向けて」pp.55-58.

- 3) 被災地 NGO 協働センター「令和 6 年(2024 年)能登半島地震救援ニュース」<https://ngo-kyodo.org/2024noto/> (2024/03/25 最終閲覧)